

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

翻訳訳語辞典を公開しています
文章に携わる人のための辞書・検索サイト
DictJuggler.net (<http://www.dictjuggler.net/>)

目次

■ 翻訳発注者へ

山岡洋一

一 誇りこそが出発点

専門的な文書の翻訳を発注すると質の低い翻訳しかあがってこないという場合、翻訳者を下訳者としてしか扱っていないからということがある。翻訳者が誇りをもって仕事に取り組めるよう、翻訳に期待する質をはるかに高め、それにふさわしい料金を支払う方法を考えてはどうだろうか。

■ 翻訳講義 (4)

山岡洋一

一 明晰な訳文を書くために

英文和訳は後ろから前に訳していき、同時通訳は前から後ろに訳していく。翻訳にあたっては、原文のパラグラフ構造を理解したうえで、最適な訳し方を考える柔軟性が必要だ。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

誇りこそが発点

最近、産業翻訳の発注者と話す機会があった。翻訳しなければならぬ文書が大量にあるのだが、引き受けてくれる翻訳会社や翻訳者が不足していて、ごく一部しか発注できていないという。需要があるのに、供給が追いついていないというわけだ。翻訳者、とくに駆け出しの翻訳者にとって、信じがたい話だと思えるかもしれない。競争がはげしくて、仕事をとるのが容易ではないと思えるはず、つまり、供給の余力は十分にあるのに、需要が不足していると思えるはずなのだ。だが、これはとくに珍しい話ではない。産業翻訳でも出版翻訳でもつねに、発注者からみれば供給が不足しているし、翻訳者からみれば需要が不足していると思える状況がある。供給と需要のミスマッチがいつもあるのだ。なぜこのような状況がいつまでも続いているのかを考えるヒントになると思えるので、発注者の話をもう少し紹介しておこう。

この発注者は専門性の高い文書の翻訳を必要としている。現状では、何人かの翻訳者に依頼しているが、納品された翻訳を発注部門の担当者がチェックし、つぎに専門家がチェックし、最終的に専門家の委員会で疑問点の解決と訳語の確定を行っている。こうして3段階にわたってチェックと修正を行った結果は、翻訳者にフィードバックしているが、当初の訳文とはまったく違ったものになることも少なくない。確定した訳語はデータベースに登録して翻訳者に渡しているのだが、それでもなかなか質が高まっていかない。このように手間がかかるうえ、翻訳者の数も不足しているので、発注を増やすことがなかなかできない。

この発注者はいろいろな方法を考えているようだった。まず、少なくともチェックの段階をひとつ減らすのが目標だという。優れた翻訳があがってくれば、現在の3段階を2段階に減らすことは可能だろう。そうなれば、処理量をもっと増やせる。そのためにもっと優秀な翻訳者を探すのがいちばん簡単な方法だろうが、なかなかうまくはいかないという。

すぐれた翻訳会社に依頼する方法も考えているという。訳語のデータベースをもっと拡充し、翻訳のマニュアルを整備し、それらに厳密にしたがって翻訳するよう求める。この点で違反がないかどうかを

チェッカーが点検し、違反があれば、翻訳者に修正を求め、場合によっては翻訳料金を減額する。そういう仕組みがしっかりしている翻訳会社に依頼すれば、もっと質の高い翻訳があがってくるようになるのではないだろうかという。要するに、管理を強化して品質の向上をはかる方法である。

こうした話を聞いているうちに、どこにもある問題だとは思いつつも、何かが変わるようになっていった。個人的な経験からいうなら、専門性の高い文書ほど、じつは訳しやすい。もちろん、内容を理解しなければ訳せない。そして、内容を理解するのは簡単ではない。簡単なら、その分野の専門家が高収入を得られるはずがない。でも、書いているのは同じ人間だし、この場合なら、翻訳をチェックしているのも同じ人間だ。読者も同じ人間である。だから、理解できないはずはない。もちろん、時間はかかる。しかしこの場合、仕事はこなせないほどあるというのだから、翻訳者の側からみれば、ある程度の時間をかけて学ぶ理由が十分にある。ここまで好条件が揃っているのに、翻訳の質が高まっていかないのは、逆に不思議ではないだろうか。この仕組みを続けて数か月から1年もすれば、翻訳者からあがってきた原稿をそのまま使えるようになって不思議ではないと思えるのだが。

そこで、いくつかの点を質問してみた。まず翻訳料金の決め方、つぎに単価、翻訳者の推定処理量などである。発注しているのはほぼすべて英和翻訳であり、仕上がり400字当たりの単価を取り決めて支払っているという。それに1日当たりの推定処理量を掛けて20倍すると、月当たりの収入が分かり、それを12倍すると、年間の収入が分かる。そうやって、在宅翻訳者の収入がほぼ分かった後、初任給を聞いてみた。専門家ではない事務員の大卒初任給は、ほぼ世間相場並みのようだった。専門家の卵の場合には、初任給ははるかに高い。そのうえ、実力のある専門家なら、短期間のうちに高額所得者になる。高給の専門家が時間をかけて翻訳をチェックしなければならぬのですから、大変ですという。

そうやって比較してみても気づかない様子なので、ずばりと指摘することにした。翻訳者の手取りはたぶん、事務員の大卒初任給にも及ばない。時給に換

算すれば、最低賃金にも及ばないかもしれない。いや、大卒初任給よりはよい計算になるし、それに在宅ですから、と発注者はいう。だが、在宅の請負ということは、機器などの設備から事務所費まで、すべて自分持ちということだ。すべて雇い主負担の事務員とは違って、かなりの経費がかかる。翻訳者の収入というのは会社でいえば売上であって、実際に使えるのは経費差し引き後の所得だ。手取りといったのは、この経費差し引き後の所得のことだと説明した。そして、仕事は所得だけで判断できるものではないが、そう主張できるのは、受け取る側だけのはず。支払う側はいくら支払っているかで、相手への評価を示している。この発注者の場合、翻訳者を大卒の新人よりも低く評価しているのである。そういうことになりませんかと質問すると、反論できないようだった。

これでは、どんな方法をとるにしても、小手先の手段ではうまくいかない。基本的な部分を変えなければいけない。少なくとも、変えるよう努力しなければいけない。そう思えた。

この発注者は翻訳者がそのまま使える完全原稿を納品するはずだとは考えていない。翻訳者は専門知識がないので、専門家がチェックして改訂しなければ使えるようにはならないと考えているのである。この場合、翻訳者という言葉は適切ではない。実際の役割は下訳にすぎないのだから、下訳者と呼ぶべきである。最終的なチェックを行い、原稿を完成させている専門家が、いわば元訳者になっている。そして、翻訳の料金からチェックの過程まで、すべての点が下訳者と元訳者の関係にふさわしい形で組み立てられている。

たとえば、翻訳料金は安く、翻訳者は経費を差し引いた後でみて、まともな生活ができるとは思えない所得しか得られない。配偶者か親が稼いでいるから人並みの生活ができるにすぎない。所得という点で、一人前として扱われていないのである。また、フィードバックは一方だけでしかない。専門家による改訂や訳語の選択に対して、翻訳者の側が意見を述べるとは考えられていない。翻訳者は専門家の指示に黙って従うものだと考えている。

翻訳者を下訳者として扱っているのだから、下訳者レベルの人しか残らない。もっと上を目指す人、実力がついた人はどんどん抜けていく。だから、下訳レベルの翻訳があがってくるのは当然なのだ。

だが、この点を理解するのは容易ではないようだ。たとえば、内容については専門家がチェックするので、英文の解釈という点で間違いのない翻訳をするよう翻訳者をお願いしているが、肝心要の英文の解釈を間違えている翻訳が多いので困っているという。この発注者は、内容を十二分に理解しないかぎり、英文を正しく解釈することは不可能だという事実気づいていないようだ。内容の理解と英文の解釈は表裏一体であり、切り離すことはできない。この2つの側面で分業が成り立つような性格の仕事ではない。だから、翻訳者であれば、原文の意味を十二分に理解したうえで、完全な原稿を書こうと努力するはずだ。内容の理解の部分は専門家にお任せしたいと考えているのであれば、その人は翻訳者ではない。下訳者にすぎない。

管理を強化する方法で品質の向上を目指そうとしているのも、翻訳と翻訳者に対する無理解のためだ。訳語を決め、翻訳マニュアルを整備するといった方法はおそらく逆効果になる。マニュアルというのは戦後のある時期から、なぜか、アメリカの先進性と日本の後進性を象徴するものだと受け止められるようになった。それ以来、一種の強迫観念になっている。だから何か問題が起こるとすぐに、マニュアルが整備されていないという話になる。だが、マニュアルを整備して管理を強化するという考え方は、肉体労働と頭脳労働の分業に基づくものだ。アメリカでは、現場の労働者は工場に入るときに、守衛に頭を預けておくといわれていた。現場の労働者は頭脳を使う必要はない。考えるのは上の人間の仕事だ。頭のいい人が考えた結果はみな、マニュアルに書いてあるので、その通りに仕事をすればよろしい。マニュアルに違反したときに何が待っているかは分かっているだろうね、というわけだ。製造業でも時代後れとされているこういう文化のなかで生まれたマニュアルが、翻訳という仕事に適しているかどうか、考えてみるべきだろう。

このように、翻訳者を下訳者として扱っているから、下訳者レベルの人しか残らないのだが、この点は、発注者にとってなかなか理解できないのかもしれない。発注者という立場上、上下関係の感覚が抜けきれない場合が多いからだ。そのうえ、上下関係の感覚は下の立場からみればよくみえるが、上の立場からはなかなか意識できないので、じつに厄介だ。

それはともかく、発注者の立場からは、翻訳者の

利点がどこにあるかをみきわめることが大切だと思う。少し考えればすぐに分かることだが、翻訳という仕事を選ぶのは、楽に稼げる仕事だと考えているからではない（もちろん、そういう人もいるかもしれないが、現実気づけばすぐに辞めていく）。苦勞が多いわりに実入りが少ない。それでも続けているのは、翻訳という仕事そのものに魅力を感じているからだ。収入よりも仕事の魅力を優先するのでなければ、長続きはしない。だから、翻訳者はたいてい、向上心が強い。もっともっと実力をつけて、もっといい仕事がしたいと考えている。熱心に学んでいる。発注者からみれば、心強い利点だ。この利点を活かさない手はない。

ではどうすればいいのか。具体的な方法は、現状がもっとくわしく分からなければ提案できない。しかし、一般論としてなら、いくつかの点を指摘できると話した。

いちばん重要な点は、翻訳者が誇りをもって仕事に取り組める環境を作ることだろう。発注者の立場で、そのために真っ先に考えるべきは、翻訳者の収入がはるかに増えるようにすること、少なくとも、もっと質を高めれば増えると思込めるようにすることだ。手取りで大卒初任給にも及ばないのが現状なら、何パーセントか増えると見込めるようにするのは不十分だ。たぶん、何倍にも増えると見込めるようにするべきだろう。そうする理由は簡単だ。現在の収入では、仕事に誇りをもてるはずがない。何か月か何年続けて実力がついた人は、もっと収入のよい仕事に移っていく。下訳者の力しかない人だけが残ることになる。だから、発注者の側はいつまでも、質の低い翻訳に苦しむことになる。この泥沼から抜け出すには、ほんとうに優れた翻訳者、専門的な内容にも責任を負う翻訳者、そのまま使えるほど質の高い翻訳ができる翻訳者を維持し、引きつけられるようにしなければいけない。要するに、翻訳者に期待する質をはるかに高く設定し、それにふさわしい料金を支払うようにするべきなのだ。

専門的な内容にまで責任を負うよう翻訳者に求めるのは無理だと思えるかもしれない。ほんとうに優秀な人たちが最低でも2年から3年、ときには5年以上も必死に学んでようやく卵になれるにすぎないほど難しい専門分野なのだから。だが、翻訳者に期待する質を高く設定し、それにふさわしい料金を支払っていけば、たぶん、数か月から1年もするとほんとうに優れた翻訳があがってくるようになるので

はないだろうか。なぜかという、翻訳者は違った学習方法を使うからだ。翻訳者に独特の学習方法とは、翻訳を行うことである。翻訳にあたっては普通の読書や学習の際とくらべて、ときには10倍も深く原文を読む。それに、原文に理解できない点があれば、訳文は書けないので、周辺知識や基礎的な知識を真剣に学ぶ。だから翻訳とは、学習の過程なのであり、しかも、たいていの学習法よりはるかに密度の濃い学習なのである。だから、同じ分野の翻訳を数か月も続けていけば、翻訳者の力は飛躍的に高まる。

だが、翻訳が学習になり、翻訳の質を高める決め手になるのは、原著者が伝えようとした意味を母語で伝えることに、翻訳者が専念しているときだけである。専門的な内容については専門家に任せておけばいいのであれば、翻訳を行ってもそれほど効果的な学習にはならない。翻訳には本来、知らなかったことを知り、理解できなかったことを理解していくという楽しむと喜びがあるのだが、意味が分からないくてもいいから訳していくのでは、翻訳は苦痛でしかなくなる。これでは翻訳の質は高まっていかない。だから、翻訳者に期待する質をはるかに高く設定し、それにふさわしい料金を支払うようにするべきなのだ。

それ以外の点はいわば、枝葉末節にすぎない。たとえば、翻訳者がどれほど優秀でも、間違ふことはあるのだから、チェックを完全になくすことはできない。そこで、他の翻訳者にチェックを依頼する方法を考えることもできる。これは専門家の間でごく普通に使われている方法なので、おそらく、発注者にとって馴染みがあるはずである。また、翻訳者が内容の理解に苦しんだときに相談にのってもらえる専門家を決めておけば役立つだろう。疑問点や問題点を解決し、訳語を確定する委員会には、翻訳者の代表を加えるべきだろう。確定した訳語のデータベースの作成は、翻訳者のグループに任せる方がいいかもしれない。

前述のように、専門性の高い文書の翻訳はじつのところ、質を高めていくのが比較的やさしい。内容をしっかり理解すれば、質を高めることができる。だから、しっかりとした仕組みを作れば、問題を解決するのはそう難しくないはずだ。難しいのは、発注者が上下関係の感覚を払拭することかもしれない。

明晰な訳文を書くために

前回には構文解析について説明しました。原文を正確に読むことは翻訳の出発点です。とくに原文の文法構造を正確につかむことは、翻訳の基礎の基礎であり、この点で間違いが多いようでは話になりません。

ですが、これは出発点にすぎません。翻訳の質は最終的に訳文の質で、つまり日本語の質で判断されます。そこで今回は、日本語の質を高めるために考慮すべき点をとりあげます。前回までの講義にしたがって、フランクリン・ローズベルトの第 1 期大統領就任演説の第 1～第 4 パラグラフについて、訳文を改定してもらいましたので、今回は改定された訳文をさらにどう改良すべきかを考えていきます。みなさんの翻訳からいくつかの例をあげますが、いずれも改定後のものです。

構文の複雑な原文の訳し方

まずとりあげるのは、原文の構文が複雑な場合の訳し方です。第 1 パラグラフの第 4 センテンスとその訳例をあげます。

原文 1

So, first of all, let me assert my firm belief that the only thing we have to fear is fear itself—nameless, unreasoning, unjustified terror which paralyzes needed efforts to convert retreat into advance.

訳例

- 1.1 ですからまず初めに、我々が恐れなければならない事はたったひとつの恐怖、つまり後退から前進へと転換する為に必要な取り組みを麻痺させる、名状しがたい、理屈に合わない不当な恐怖感そのものである、という私の確固たる信念を主張させていただきたい。
- 1.2 そしてまず、真に恐れなければならない唯一のことは、後退を発展へと変えるために必要な努力を無効にしてしまう、恐れそのもの（つまり名状しがたく、不合理で正しくない恐怖）であるという信念を私に述べさせてください。
- 1.3 では、まず最初に、私の確固たる信念を主張させて下さい。その信念とは、我々が恐れなければならない唯一のものは、恐れそのものであるということです。表現しがたく、理屈に合わず、筋の通らない恐怖。これは、後退を前進へと転換するために必要な努力を麻痺させるので

す。

まず、原文の構造を確認しておきましょう。このセンテンスは大きく 4 つの部分に分けることができます。

- ① So, first of all, let me assert my firm belief
- ② that the only thing we have to fear is fear itself
- ③ —nameless, unreasoning, unjustified terror
- ④ which paralyzes needed efforts to convert retreat into advance.

ここで、①が主節、②は接続詞の that に導かれた名詞節であり、belief と同格で、その内容を説明しています。③はダッシュにみちびかれていて、fear の言い替え、④は terror を先行詞とする関係代名詞、which を主部とする関係詞節です。主節があって、その中の目的語を that 以下で説明し、その節の補語をダッシュ以下で言い替え、さらにそれを説明する節が後ろにつくという形になっています。少し複雑な構造になっていますが、複雑すぎることはなく、訳し方を考えていくのに最適だと思われます。

そこで 3 つの訳例をみていきましょう。これは改定版から選んだものです。第 1 回訳文の全員分を読み、優れた翻訳を参考にして改定したわけですから、どの訳もかなりよくなっています。ですが、全員の訳が同じになったわけではなく、訳し方にかなりの違いがあることが分かるはずですが、言葉の選択という点でも工夫の余地はありますが、その点は無視して、前述の 4 つの部分をもどのような順番で訳しているのかをみていきましょう。

まず 1.1 は、①-②-④-③-②-①という順番に訳しています。1.2 は若干の違いがあり、③を括弧内で処理していますが、順番としては 1.1 と同じです。まずは頭の部分を訳し、つぎにいちばん後ろを訳して、前に戻ってくるという訳し方です。これは英文和訳で常識になっている訳し方です。

つぎに、1.3 をみてみると、順番が大きく違っています。①-②-③-④と、前から後ろに、原文通りの順番に訳しています。これは英文和訳の常識からは

外れていますが、通訳、とくに同時通訳で一般的な訳し方です。同時通訳では、前から順番に訳していくしかないからです。たとえば 1.1 のように訳そうとすると、let me assert my firm belief の部分を最後に訳すわけですから、この部分はまだ訳していないことを覚えておかなければなりません。つぎに which paralyzes needed efforts to convert retreat into advance の部分を訳すときには、そのひとつ前にある nameless, unreasoning, unjustified terror もまだ訳していないことを同時に覚えておかなければなりません。このような訳し方では記憶能力に負担がかかりすぎるので、前から順番に訳していくしかないのです。

英文和訳では後ろから前に訳し、同時通訳では前から後ろに訳していきます。翻訳ではどうでしょうか。翻訳の際には原文が手元にあるわけですから、同時通訳の場合とは違って、記憶力の制約を気にする必要はありません。ですから、前から後ろに訳していかなければならないわけではないといえます。

そして、翻訳にあたって英文和訳の訳し方を使わなければならないとする理由もありません。ですから、翻訳にあたっては自由に表現を考えていけばいいのです。場合によって、前から後ろ、後ろから前のどちらの方法も使いますし、どちらでもない訳し方を使うこともあります。どのような方法を使っても、原文の意味を読者に伝えるために最善を尽くせばいいのであって、それ以外に制約条件はありません。

別の例をみてみましょう。第 1 パラグラフの第 1 センテンスの途中からと、その訳例です。

原文 2

I am certain that on this day my fellow Americans expect that on my induction into the Presidency I will address them with a candor and a decision which the present situation of our people impels.

訳例

2.1 私は、仲間であるアメリカ国民の皆さんが、

INAUGURAL ADDRESS OF FRANKLIN DELANO ROOSEVELT

Given in Washington, D.C.

March 4th, 1933

This is a day of national consecration, and I am certain that on this day my fellow Americans expect that on my induction into the Presidency I will address them with a candor and a decision which the present situation of our people impels. This is preeminently the time to speak the truth, the whole truth, frankly and boldly. Nor need we shrink from honestly facing conditions in our country today. This great Nation will endure as it has endured, will revive and will prosper. So, first of all, let me assert my firm belief that the only thing we have to fear is fear itself—nameless, unreasoning, unjustified terror which paralyzes needed efforts to convert retreat into advance. In every dark hour of our national life a leadership of frankness and of vigor has met with that understanding and support of the people themselves which is essential to victory. And I am convinced that you will again give that support to leadership in these critical days.

In such a spirit on my part and on yours we face our common difficulties. They concern, thank God, only material things. Values have shrunk to fantastic levels; taxes have risen; our ability to pay has fallen; government of all kinds is faced by serious curtailment of income; the means of exchange are frozen in the currents of trade; the withered leaves of industrial enterprise lie on every side; farmers find no markets for their produce; and the savings of many years in thousands of families are gone.

More important, a host of unemployed citizens face the grim problem of existence, and an equally great number toil with little return. Only a foolish optimist can deny the dark realities of the moment.

And yet our distress comes from no failure of substance. We are stricken by no plague of locusts. Compared with the perils which our forefathers conquered because they believed and were not afraid, we have still much to be thankful for. Nature still offers her bounty and human efforts have multiplied it. Plenty is at our doorstep, but a generous use of it languishes in the very sight of the supply. Primarily this is because the rulers of the exchange of mankind's goods have failed, through their own stubbornness and their own incompetence, have admitted their failure and have abdicated. Practices of the unscrupulous money changers stand indicted in the court of public opinion, rejected by the hearts and minds of men.

大統領就任式において、私が国民の現状を駆り立てる誠実と決心を持って演説することに期待していると確信しています。

2.2 そして、私は確信しています。今日、この日に、大統領就任にあたって、誠実さと国民全員の現在の状況が期待する決意を持って、あなた達に演説することを期待していると。

この原文もやはり、接続詞や関係代名詞によって、大きく4つの部分に分かれています。

- ① I am certain
- ② that on this day my fellow Americans expect
- ③ that on my induction into the Presidency I will address them with a candor and a decision
- ④ which the present situation of our people impels.

ここにあげた2つの訳例がどのような順番で訳しているかをみてみましょう。2.1は①-②-③-④-③-②-①です。英文和訳型の典型的な訳し方だといえます。2.2は少し違って、①-②-③-④-③-②です。①をはじめに訳しきっていて、最後に戻ってくる方法をとっていないところが、2.1との大きな違いです。部分的にはあっても、前から後ろに訳す方法をとっているといえます。

前から訳す理由

以前は翻訳というと、英文和訳式に後ろから前に訳していくのが常識でした。このために、問題が起こっていました。今回の例では原文のセンテンスが大きく4つに分かれているにすぎないので、じつのところ、前から訳そうが後ろから訳そうが、それほど違いはないともいえますが、英文ではもっと構造が複雑になっていることも少なくありません。そのときに後ろから前に訳していく方法をとると、訳文が複雑になりすぎて、理解が難しくなるという問題がでできます。

実際のところ、英文のセンテンスがたとえば例2のように接続詞や関係代名詞によっていくつもの部分に分かれているとき、構造が複雑だというのは、英文和訳式に訳そうとしたときに訳文の構造が複雑になるという意味であって、英文の構造自体が複雑であるとはかぎりません。例1でも例2でも、①から④までの各部分はそれぞれ独立してひとつの意味を伝えています。①から④まで、順番に読んでいけばそれで全体の意味が容易に理解できるようになっています。どこにも複雑な点はないといえるはずですが、ところが、これを英文和訳式に理解しようとする、とたんに複雑な構造になるのです。

もう少し複雑な例を紹介しましょう。

例3

The object of this Essay is to assert one very simple principle, as entitled to govern absolutely the dealings of society with the individual in the way of compulsion and control, whether the means used be physical force in the form of legal penalties, or the moral coercion of public opinion. (J.S. Mill, On Liberty)

この論文の目的は、用いられる手段が法律上の刑罰というかたちの物理的な力であるか、あるいは世論の精神的強制であるかいなかにかかわらず、およそ社会が強制や統制のかたちで個人と関係するしかたを絶対的に支配する資格のあるものとしてひとつの極めて単純な原理を主張することにある。(塩尻公明・木村健康訳『自由論』24ページ、岩波文庫、1971年)

原文は少し細かく分けると、以下の7つの部分に分かれています。

- ① The object of this Essay is
- ② to assert one very simple principle,
- ③ as entitled to govern absolutely
- ④ the dealings of society with the individual
- ⑤ in the way of compulsion and control,
- ⑥ whether the means used be physical force in the form of legal penalties,
- ⑦ or the moral coercion of public opinion.

これに対して訳文は、①-⑥-⑦-⑥-④-⑤-④-③-②-①になっています。明快で論理的な原文から、千鳥足のように迷走していて、理解しにくい訳文が生まれています。

この訳文が理解しにくい理由のひとつは、読者の記憶に負担がかかりすぎることです。「この論文の目的」が何なのかは、最後まで読まなければ分かりません。だから、この部分がまだ完結していないことを覚えておかなければなりません。同時通訳者が後ろから前に訳そうとするとぶつかるのと同じ点で、読者にとって問題になります。翻訳の際には手元に原文があるし、何といたってもスピードがきわめて遅いので、記憶力の制約を気にする必要はないのですが、読書のスピードははるかに速いので、この点が問題になります。

このような点を考えると、前から順に訳していった方が明晰で論理的な訳文になると思えるはずですが、このため、いまでは翻訳にあたってはなるべく前か

ら順に訳していく方法をとるべきだという考え方が主流になってきています。

後ろから訳す理由

しかし、英文和訳で後ろから前に訳していく方法がとられているのは偶然ではありません。英文和訳の方法は明治中期以降に確立した翻訳方法を基礎にしています。そして、明治中期以降に後ろから前に訳していく翻訳方法が確立したのは、根拠があるからなのです。それを示す例を2つあげます。

例 4

The flow of the river is ceaseless and its water is never the same. The bubbles that float in the pools, now vanishing, now forming, are not of long duration: so in the world are men and his dwellings. (Anthology of Japanese Literature from the Earliest Era to the Mid-Nineteenth Century, Donald Keene, Grove Press, 1960)

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。(鴨長明『方丈記』)

例 5

The months and days are the travellers of eternity. The years that come and go are also voyagers. Those who float away their lives on ships or who grow old leading horses are forever journeying, and their homes are wherever their travels take them. (ドナルド・キーン訳『対訳 おくのほそ道』、講談社インターナショナル、1996年)

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。(松尾芭蕉『おくのほそ道』)

これはどちらも日本語で書かれた古典を英訳した例ですが、逆の方向に、つまり英語から日本語に翻訳すると考えたときにどうなるかをみてみましょう。

翻訳する例4の英文のうち、The bubbles that float in the poolsの部分を日本語に訳そうと考えたとき、前から訳すのが正解でしょうか、それとも後ろから訳すのが正解でしょうか。以前に翻訳には正解はないという話をしましたが、この場合は例外です。もとの原文は日本語で書かれているのですから、この部分は、「よどみに浮かぶうたかたは」と、後ろから前に訳していくのが正解です。

例5の Those who float away their lives on ships or

who grow old leading horsesにも同じことがいえます。「舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は」と、後ろから前に訳していくのが正解なのです。

ここで『方丈記』と『おくのほそ道』を例にあげたのは、どちらもヨーロッパ言語からの翻訳で日本語が大きく変わる以前に書かれたものだからです。現在の日本語の原型を作ったのは、夏目漱石、森鷗外外でしょうが、漱石は英文学者でイギリスに留学しているし、鷗外もドイツに留学していて、ヨーロッパの言語からの影響を強く受けています。鴨長明や松尾芭蕉はそのような影響を受けていないので、『方丈記』や『おくのほそ道』は日本語の本来の形を示しているといえるはずですが。そして、日本語では、たとえば「うたかた」という語を「よどみに浮かぶ」という節で修飾しようとする、前にもってくるのが自然なのです。これに対して英語の場合は、ドナルド・キーンが示すように、関係代名詞を使って後ろにおくのが自然だといえます。

したがって、関係代名詞の限定用法は後ろから前に訳すという原則が明治半ば以降に確立し、それが学校英語の英文和訳にも取り入れられたのは、日本語らしい訳文にするためだったのです。

後ろから訳したときの問題

では、日本語らしい訳文にするはずだった訳し方で、例3のように理解しにくい訳文ができるのはなぜなのでしょう。日本語らしい文章であれば、読みやすく理解しやすくなるはずではないのでしょうか。

例1の原文を図式化すると、以下のような構造になっています。

- ① let me assert my belief
- ② that A is B
- ③ B is C
- ④ C is D

英文和訳の原則通りに訳すと、訳文の構造は以下の図式のようになります。

- ① わたしは
- ② Aは
- ④ Dであるところの
- ③ Cであるところの
- ② Bである
- ① と主張する

原文の論理構造はじつに分かりやすく明快です。これに対して、訳文の構造はまわりくどくなっています。つまり、*The bubbles that float in the pools* なら、「よどみに浮かぶうたかたは」と訳せばいいのですが、英文ではこのように修飾の関係が一重だけで終わるとはかぎらないのです。二重、三重、四重になっていきます。そうなるともう手に負えなくなります。いかにも翻訳調の文章になり、日本語らしく、読みやすく理解しやすい文章ではなくなる可能性があります。

いかにも翻訳調という印象を与える文章にしたくない場合には、前から後ろに訳していく方法を取り入れるのがいいでしょう。そのとき、何重にもなっている修飾関係のすべてにわたって、前から後ろに訳していかなければならないわけではありません。日本語らしい素直な文章では、「よどみに浮かぶうたかたは」という形になるのですから。

そこで、訳例 1.3 の最初の部分をもう一度みてください。前から後ろに順番に訳していく方法がとられています。

1.3

では、まず最初に、私の確固たる信念を主張させて下さい。その信念とは、我々が恐れなければならない唯一のものは、恐れそのものであるということです。

ここで注目したいのは、「その信念とは」です。原文には、「その信念とは」にあたる語句はないと思えます。強いていえば、接続詞の *that* に含まれている意味を表面にだしたといえます。いずれにせよ、前から後ろに順番に訳していくときには、ひとつのセンテンスをいくつにも切って訳すことになるので、このような工夫によって各部分をつなぐことが不可欠です。その際には、原文をセンテンス単位ではなく、パラグラフ単位でみていくことも重要です。とくにつぎのセンテンスとのつながりがどうなっているかに注目すべきです。

そこで課題です。原文 2 の訳例 2.1 の順番だけを変えて、幾通りに訳せるかを考えてみてください。訳語はなるべく変えず（もちろん、納得ができない言葉があれば変えてもいいのですが）、順番だけを変えるとどうなるかです。もう一度、原文と訳例 2 をあげます。

原文 2

I am certain that on this day my fellow Americans expect that on my induction into the Presidency I will address them with a candor and a decision which the present situation of our people impels.

訳例 2.1

私は、仲間であるアメリカ国民の皆さんが、大統領就任式において、私が国民の現状を駆り立てる誠実と決心を持って演説することに期待していると確信しています。

たとえば、以下があります。

2.1b

私は確信しています。仲間であるアメリカ国民の皆さんが、大統領就任式において、私が国民の現状を駆り立てる誠実と決心を持って演説することに期待していると。

2.1c

私は、仲間であるアメリカ国民の皆さんが、こう期待していると確信しています。大統領就任式において、私が国民の現状を駆り立てる誠実と決心を持って演説すると。

ほかにもさまざまな訳し方があります。幾通りもの訳し方があることを念頭において、もっとも優れた文章を選ぶのが翻訳です。

パラグラフの論理構造を理解する

翻訳にあたっては、原文をセンテンス単位ではなく、パラグラフ単位でみていくべきだという話をしましたので、パラグラフについて、少し触れておきます。

英語のパラグラフにあたるのは日本語の段落でしょうが、段落に関しては論理構造という観点から考えることはあまりないように思います。段落が長い文章は読みにくいという先入観があります。ですから、長くないところで切っておこうとすることが多いようです。こういう感覚が強いため、翻訳書では、「読みやすく」したいということで、原文のパラグラフをいくつもにも分けていることがあります。これがいかにとんでもないことかは、パラグラフの論理構造を考えるようになると、あきらかになると思います。

日本語の段落が長さを基準にしていることが多いとするなら、英語のパラグラフは論理を基準にしていることが少なくありません。ひとつのパラグラフでひとつの点を論じるのが普通です。1 行で論じる

ことができれば、1 行で 1 パラグラフになりますが、かなりくわしく論じる必要があれば、1 ページ以上にわたって 1 つのパラグラフが続くこともあります。パラグラフの区切りは論理の区切りですから、翻訳にあたってパラグラフを切ったりつないだりすることには、きわめて慎重になるべきです。原文ではかなり長いパラグラフを短く切っていくと、一見、読みやすい文章になるように思えますが、実際に読んでいくと、論理の流れが理解しづらいという結果になることが少なくありません。英文のパラグラフはとても重要なのです。

日本語の段落は、長くなりすぎないように切っておこうといった程度のものであることが多いため、英語のパラグラフについても、論理構造があまり意識されないのが普通でしょう。学校英語で教えられたことはあまりないはずですが。パラグラフの論理構造という点を教えられたことがあるとすると、たぶん、英文ライティングを学んだときでしょう。とくに論理的な文章を書く際には、パラグラフの論理構造をしっかりさせるように教えられるはずですが。

そういう観点から書かれた本のひとつ、篠田義明著『コミュニケーション技術』（中公新書）の 74-79 ページから、パラグラフ構造の典型例を示しておきましょう。

(1) 並列型

A とは…である。(総論)

- a1 とは…である。(各論)
- a2 とは…である。(各論)
- a3 とは…である。(各論)

(2) 直列型

A とは…B である。(総論)

- B とは…C である。(各論)
- C とは…D である。(各論)
- D とは…E である。(各論)

(3) 分析並列型

A は…B、C、D である。(総論)

- B は…である。(各論)
 - b1 は…である。(各論)
 - b2 は…である。(各論)
- C は…である。(各論)
 - c1 は…である。(各論)
 - c2 は…である。(各論)
- D は…である。(各論)

d1 は…である。(各論)

d2 は…である。(各論)

(4) 分析直列型

A は…B、C、D である。(総論)

- B は…a である。(各論)
 - a は…b である。(各論)
 - b は…c である。(各論)
- C は…d である。(各論)
 - d は…e である。(各論)
 - e は…f である。(各論)
- D は…g である。(各論)
 - g は…h である。(各論)
 - h は…i である。(各論)

実際のパラグラフ構造はもっと複雑な場合もありますが、このような基本構造を頭に置いておくと、原文の構造が理解しやすくなります。そして、原文のパラグラフの構造をしっかりとつかめれば、明晰な訳文を書く一助になります。具体例として、課題の第 2 パラグラフをみてみましょう。

原文 6

In such a spirit on my part and on yours we face our common difficulties. They concern, thank God, only material things. Values have shrunk to fantastic levels; taxes have risen; our ability to pay has fallen; government of all kinds is faced by serious curtailment of income; the means of exchange are frozen in the currents of trade; the withered leaves of industrial enterprise lie on every side; farmers find no markets for their produce; and the savings of many years in thousands of families are gone.

第 1 センテンスが総論です。このセンテンスの最後の言葉は *difficulties* です。そしてつぎの第 2 センテンスでは、*difficulties* を *They* と言い替えたうえで、説明を加えています。篠田義明の分類では、ここまでは直列型です。「A は……B である。B は……C である」という形になっています。

つぎの第 3 センテンスはセミコロンで区切られた 8 つの部分で構成されています。この第 3 センテンス全体は前の 2 つのセンテンスとどういう関係になっているのでしょうか。「A は……B である。B は…C である」を受けて、つぎに C の具体例をあげているのです。では、たとえば、*taxes have risen* と、*our ability to pay has fallen* の関係はどうなっているのでしょうか。原因と結果の関係だととらえた人が多かったのではないのでしょうか。第 3 センテンスの 8

つの部分がいずれもセミコロンだけで区切られていて、接続詞などが使われていない点に注目すれば、ここだけ因果関係だととらえるのは少し奇妙だと感じませんか。奇妙かもしれないと感じたのであれば、この 8 つの部分単純に並列されていて、それぞれが C の具体例である可能性を考えてみるべきでしょう。

ここで、少し注目しておくべき点をあげておきます。まずは、パラグラフの構造を確認しておきましょう。このパラグラフの構造は、以下のようになっています。

- A は…B である。(総論)
- B は…C である。(各論)
- C には…C1 がある。(具体例)
- C2 がある。(具体例)
- C3 がある。(具体例)
- C4 がある。(具体例)
- C5 がある。(具体例)
- C6 がある。(具体例)
- C7 がある。(具体例)
- C8 がある。(具体例)

ここで、前述のように、B は第 1 センテンスの終わりにある *difficulties* と、第 2 センテンスの初めにある *They* ですが、C は第 2 センテンスの終わりにある *material things* です。この点から、各センテンスの初めと終わりがとくに重要であることが分かります(第 1 センテンスの初めも、前の段落の終わりを受けた言葉です)。これは偶然ではなく、センテンスで初めの言葉と終わりの言葉が重要な位置を占めていることは、それほど珍しくはありません。この 2 つのセンテンスは構造が単純なので問題はないのですが、もっと複雑な構造の場合には、前から訳すか、後ろから訳すかを考えるとき、この点を考えてみるべきです。たとえば原文がこういう構造になっている場合です。

- A is B
- which is C
- which is D.
- D is E
- which is F.
- F is H.

原文がこのような構造になっているとき、訳文を英文和訳の公式通りにすると、つぎようになります。

- A は D であることろの C であることろの B である。

- D は F であることろの E である。
- F は H である。

原文がまっすぐに進む構造であるのに対して、訳文が酔酩したような千鳥足になることが分かるはずです。翻訳にあたっては、原文のセンテンス単位に訳していくことが多いはずですが、センテンス単位でみたとき、前から訳そうが後ろから訳そうがそれほど違いがないと思える場合でも、つぎのセンテンスの訳文とのつながりを考えると、前から訳した方がいいというときがあります(もちろん、後ろから訳す方がいいときもあります)。ですから、翻訳にあたっては、センテンスではなく、もっと大きい単位で、少なくともパラグラフの単位で検討していくべきです。そして、前からでも後ろからでも訳せるように、技術を磨いておくべきです。

第 1 パラグラフと第 4 パラグラフの構造はもう少し複雑ですが、極端に複雑というわけではありません。論理構造を考えていくと、訳文をもっと改良できるはずですが、第 1 パラグラフから第 4 パラグラフまでを再度改定してください。